

東京からこんにちは

「広域連携」で 魅力創出を

アジア開発銀行研究所 所長

河合正弘さん

Masahiro Kawai



経歴

岡山県生まれ。小学校(低学年)、中学校、高校を静岡市で過ごす。1971年、東京大学経済学部卒業。78年、米スタンフォード大学経済学Ph.D.取得、米ジョンズホプキンス大学准教授、東京大学教授を歴任。この間、世界銀行東アジア局チーフエコノミスト、財務省副財務官・同財務総合政策研究所長を務め、アジア開発銀行総裁特別顧問を経て2007年、現職に就任。東京大学名誉教授。国際経済・通貨・金融、アジア地域経済統合などに関する著書多数。主な編著書に「国際金融論」(東京大学出版会)、「アジアの金融・資本市場—自由化と相互依存」(日本経済新聞社)など。65歳。



静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

世界的なシンクタンク

「真面目な性格の人」という言葉がぴったりの人だ。財務省副財務官の時の上司が現在の黒田東彦日銀総裁。当時から黒田氏同様、切れ者として知られた。国際経済、金融・財務のエキスパートであり、インドネシア政府高官はじめ、アジア各国の財務金融当局トップとも会談するなど幅広く活躍している。

アジア開発銀行(ADB、本部・マニラ)は、67カ国が出資する国際開発銀行。「貧困の撲滅」を最終目標とし、アジアの発展途上国のインフラ整備や経済制度・環境問題の改善などに資金を融資している。研究所(東京)はそのシンクタンク。「途上国の経済発展に役立つための各国の現状分析、政策課題をリサーチし、改革に必要な政策提言をしていくのが基本的な仕事だ」。

研究所は2013年、公的機関が支援する世界のシンクタンクの中で6位(12年10位)にランクされた。「どういう政策の下で

静岡市の魅力と言えば、気候温暖、住みやすい、などが決まり文句だ。だが、埋もれた「魅力」がある。河合さんは東海道五十三次の宿場の数を挙げる。「全体の4割、22宿が静岡県にあり、そのうち6宿が静岡市にある。これはすごいことだ」。

市内には両替町、伝馬町、吳服町といった城下町の町名も残る。富士山も世界文化遺産に登録された。「(旧宿場を含め)静岡市だけで売り出すのではなく、周辺自治体や県と連携することにより、市のよさをもつと創り出せるはずだ」と提案する。知名度が上がれば、海外からの観光客増も期待できる。「中国人の人は温泉に関心がある。みかん狩りとのセットなど、アジアの観光客を呼び込むことが重要だ。静岡空港などを活用した広域観光や、広域連携にさらに力を入れ、アジアの中小企業同士の交流も深めてほしい」。

防災対策の重要性も指摘する。「万が一の場合でも安全、安心して宿泊、或いは避難できることをきちんと示す。安全だとうPRの徹底が求められる」。観光誘致の基本を忘れてはならない一言だ。

経済発展、インフラ開発を支えていくべきか、特に中国、インド、ASEANに焦点をあてアジア各国が取り組むべき課題、政策をしつかり分析している。そうした点も評価されたのではないか」と河合さん。

注目したい宿場の数